

コロナ下において日本全国で新たな生活様式にシフトしつつある。人口減少が進む秋田市でも、都会からの定住・移住に向けた取り組みが実施されており、その効果も相まって、20（令和2）年には8年ぶりに社会増（転入超過）に転じた。

大都市での新型コロナの流行拡大を受け、学生が県内での就職や進学を希望したことも背景にあるものの、行政による移住定住対策により、移住者も着実に増加しており、ポストコロナ時代では一層拍車がかかることが期待される。

近年、秋田市では、中心市街地活性化に向けた動きが活発に行われており、官民一体となって様々な事業が実施、または計画されている。この中心市街地活性化の動きはコロナ下においても着実に進行し、マンション等の建設計画



「大手門のお堀」。このお堀には7月から9月にかけて、蓮の花が咲き乱れる



「穴門のお堀」。写真左側にそびえるのは建設中の「あきた芸術劇場ミルハス」

一般財団法人日本不動産研究所 ニューノーマル最前線

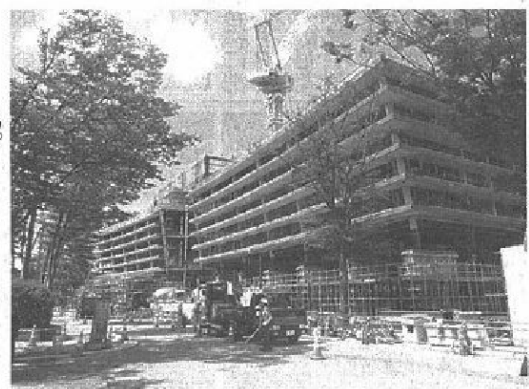
不動産の“変”と“不変” 第15回 秋田市

影響を受けながらも、時代に合わせたコンパクトシティが形成されつつある。

城跡に整備された公園

そして、この中心市街地の一角に、今も昔も変わらず千秋公園がある。千秋公園は、秋田駅西口から徒歩10分程度に位置する。初代秋田藩主である佐竹義宣が自然の台地を利用して築城した久保田城の跡地を、1896（明治29）年に公園として再整備した。春は桜、夏は蓮の花、秋は紅葉、冬は雪景色と、四季彩りの風景を感じることができ、市民に親しまれる憩いの場と

る。広小路沿いには、秋田市の中でも最も地価の高いエリアであるため、筆者は秋田に赴任した初期の頃、埋め立てて商業施設用地に転換することが秋田経済の活性化につながるかと、粗雑に考えたこともあった。ただ、長らくの歳月を経



建設中の「あきた芸術劇場ミルハス」。地上6階地下1階建て、延べ床面積が約2万2053㎡の大型劇場だ

中心市街地にある千秋公園「お堀」

文化つなぐ外堀空間を利用

モーターワーク拠点施設も徐々に増加するなど、コロナ禍の

千秋公園の入り口には、かつての城跡の名残である外堀があり、千秋公園に向かう中土橋通りを境に、東側が「大手門のお堀」、西側が「穴門のお堀」と呼ばれている。2つの「お堀」は、秋田市のメインストリートであ

て、今では駅前一等地にあるこの「お堀」の存在価値を再認識している。

「あきた芸術劇場ミルハス」

土地の高度利用という観点からは一見すると利用率が低い「お堀」だが、秋田の駅前風景に溶け込んでおり、他都市にはない秋田の風情や魅力を感じることができる。大都会のような高層ビルなどの建設による「外堀を埋める」空間利用は、秋田の文化を台無しにし、代わり映えのしない都市風景にするだけであ

現在、中心市街地活性化の目玉事業の一つとして、県と市が連携して進める新たな複合文化施設（名称「あきた芸術劇場ミルハス」）が22（令和4）年6月の開館に向けて、建設中である。

「あきた芸術劇場ミルハス」は「穴門のお堀」の北側に隣接し、周辺環境との調和に配慮した芸術文化の拠点施設として位置付けられている。「お堀」の眺望を意識した設計が施されおり、秋田市の歴史と文化の創造をつなぐ空間として、街の中心部にある「お堀」の存在価値は脚光を浴びるはずだ。（秋田支所／不動産鑑定士・平野太郎）